

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 イェレナ・プレドヴィッチ
論文題目 「音」から「言葉」へ——『風の歌を聴け』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』における小説の構造
論文審査委員 三浦 玲一、武村 知子、井上 義夫

1 本論文の構成

目次

序

第一章 『風の歌を聴け』

1. 書くことへの絶望と小説の基本構造	1
2. 断章23の時間設定と70年夏の物語の時間枠	5
3. 「言葉」から「音」へ	9
4. 「洗いだし」と「車」の関係	18
5. 小説全体の設計図としての断章23	21
6. 断章23の最後の一行について	25
7. 『風の歌を聴け』の「あとがき」について	28
8. 70年夏の物語の二週間の時間設定からはみ出している断章	30

第二章 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

1. 「洗いだし」と「新しい秩序」の関係	35
2. 「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」の時間設定	38
3. 「ハードボイルド・ワンダーランド」における「9月29日～10月1日」の物語と『風の歌を聴け』の「古い秩序」に属する物語	44
4. 「シャフリング」の意味について	48
5. 「地下世界」における「古い秩序」の「洗いだし」	51
6. 「ダニー・ボーイ」の伝達のために	59

第三章 『ノルウェイの森』「ドラマI」

1. 「ノルウェイの森」が呼び寄せる言葉の再生	68
-------------------------	----

2. 「ひっくりかえし」としての『ノルウェイの森』	74
3. 「キズキ」の死	76
4. 「ノルウェイの森」の伝達	78

第四章 『ノルウェイの森』「ドラマII」

1. 「緑」との出会いと新しいドラマの始まり	91
2. 「緑」による新しい秩序の導入の方法	94
3. 「緑」の「家」の構造	97
4. 「音」から「コトバ」そして「言葉」への逆転換	101
5. 「四」という数値についての考察	107
6. 「四つの音」から「四つの言葉」へ	112

結論 村上春樹の個人的な「ドラマ」	122
-------------------	-----

主要参考文献

2. 本論文の概要

本論文は、村上春樹の処女作『風の歌を聴け』（1979年）、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985年）、『ノルウェイの森』（1987年）が相互に関連性をもつ作品であり、これら一続きの作品において「音楽」が小説の構造そのものに深く関わっていることを明らかにしたものである。

第一章では、まず『風の歌を聴け』の断章1に記述されている「言葉」と文章を書くことに関する言説を取り上げ、語り手の「僕」が「14歳」のころから頼っていたという「ものさし」、「左側」に「得たものを書き出し、右側に失ったものを書いた」という「ノート」に注目し、それらが作者の文章観とどのように関わっているのかを、作中に使用されている比喩的な表現を通して考察する。その上で、この小説の構造における「言葉」と、「音」＝「非言語的な」表現のそれぞれの領域を「真ん中に一本の線を引いた「ノート」からヒントを得て筆者が作図する図上に割り当て、これも筆者が「洗いだし」と呼ぶ作者の手法により「言葉」が「音」に転換されてゆく過程を論じる。その際、70年夏の物語の冒頭の時間設定と断章の23章の終わりの時間設定を比較し、断章23の終わりの日付（4月4日）の倍数の日（8月8日）から始まるとされる70年夏の物語は、不伝達に終わった断章13の「カリフォルニア・ガールズ」という曲から、即ち「音」の死から始まる物語であるとする。さらにこの4月4日と8月8日の間の時間的隔たりは、『風の歌を聴け』のなかで筆者が最も重要であると考え断章、断章23の「星マーク」のある空間によって象徴されているのであり、その「空白」は70年夏の物語の「二週間」のあいだに「カリフォルニ

ア・ガールズ」という「歌」が伝達されるまでの時間に対応しているとする。「一週間目」に属するのは、断章23に記述された「言葉」と「連続的」に並べられている数値の羅列、「僕」が寝た「三人の女の子」をめぐる断章19であり、それらを断章23の「右」側に置き、「連続的」な時間における「言葉」——「女の子と寝る」という比喩が、「音」を表す数値・比喩に転換される過程を追及する。『風の歌を聴け』において「言葉」が「音」に「洗い出されて」いくとき、この小説を流れる時間の「浄化」が行われ、最終的に「二週間」に及ぶ夏の物語はその起点である「7時15分」という断章12冒頭の時間に収束するという循環構造を浮き彫りにする。

第二章では、まず「ハードボイルド・ワンダーランド」の冒頭の時間設定が『風の歌を聴け』の70年夏の物語の「二週間」及び「15分」という時間単位に照応していることに注目し、その設定において「音」が果たしている役割を、「無音」から「音の回復」されるまでの「ピンクスーツの女の子」をめぐる言説と合わせて考察することにより、小説の中で構築されていく「新しい秩序」と「音」との関係を浮き彫りにする。次に、「世界の終り」の冒頭の時間設定を『風の歌を聴け』断章の23の最後の一行で「音」の死が語られたことと関連させ、『風の歌を聴け』で「カリフォルニア・ガールズ」が伝達されたのち、「世界の終り」の「街」の「図書館」に、「OFF」状態になった断章23が葬られていると論じている。その後で、「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」の物語の接点を示すために、両物語において言及される「ダニー・ボーイ」という唄の歌詞に着目し、この唄の歌詞及び「世界の終り」の物語で言及される「音声パターン」を、「ハードボイルド・ワンダーランド」の「私」が行う「洗いだし」と「シャフリング」と関連させることにより、この小説においてどのように「数値」が「音」を「語っている」のかを明らかにする。

さらに「ハードボイルド・ワンダーランド」の物語における「地下世界」への突入は、『風の歌を聴け』における「歌」の伝達のあとで「閉じられ」た語り手の「耳」＝「街」の「門」への突破から始まると解釈し、「地下世界」の通過を通してどのように「古い秩序」における「連続的な時間」及び「言葉」が「洗いだ」されるかが示される。語り手の「表層意識」に関わる物語が身体的な表現と関連付けて考察され、「深層心理」レベルの物語を『風の歌を聴け』の「二週間目」に関わる物語と並行させ、両物語において言及される「三つの曲・唄」に着目する。「地下世界」の通過は語り手の内部の映像化として語られ、「暗黒世界」を通過することで「街」の地図に喩えられた「OFF」状態の断章23の「言葉」の領域（「右」側）と「音」の領域（「左」側）の間に「ブリッジ」が架けられるようになると論じられる。この「ブリッジ」はまた語り手の分裂の象徴である「街」の「南半分」＝「体」と「北半分」＝「頭」の間にも架けられ、それを通じて伝達される「ダニー・ボーイ」は、分裂した語り手の「頭」と「体」の合体を可能にしていると言われる。

第三章では、『ノルウェイの森』の第一章に見られる『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の末尾の時間設定及び地理的な要素との類似性から、『ノルウェイの森』の「僕」と「直子」を中心とする物語は「世界の終りのドラマ」と続きであると解釈する。その上で、『世

界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と『ノルウェイの森』両小説の冒頭部において「音」が果たしている機能に着目し、『ノルウェイの森』の冒頭に挿入された「ノルウェイの森」という旋律によって呼び起こされた「草原」の風景の場面は、不伝達に終わった「ノルウェイの森」という曲の象徴であると解釈する。「直子」の話における「井戸」の位置と『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の末尾で「ダニー・ボーイ」が伝達されている位置との地理的な類似を確認したあと、『風の歌を聴け』の断章23と及び「世界の終り」の「街」の地図に基づいて筆者が作成した「東京」の地図に依拠して、第一章と第二章で論じた断章23の再編の過程をさらに追及する。

続いて『風の歌を聴け』の断章23における「カリフォルニア・ガールズ」の伝達に関わる「5分」と、最後の一行によって示唆される「煙草の火」というモチーフを、「キズキ」と「僕」がプレーした「ビリヤード」の場面と関連付け、『風の歌を聴け』の断章23における「音」の死がどのように「キズキ」の死を通して「語り直されて」いるのかを考察する。そして「キズキ」の死から「一年」後に設定されている「直子」との再会を、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』冒頭に語られる「僕」と「街」の「図書館の女性」との出会いの場面と関連させ、「直子」との「再会」から「一年」後に行われる「ノルウェイの森」の伝達に至る過程を明らかにする。

第四章は、『ノルウェイの森』の第四章から語り始められる「僕」と「緑」をめぐる物語を「世界の終り」の「ドラマII」として位置づけ、この「ドラマ」は、「大学」の「図書館」に葬られた断章23の「星マーク」「A」と関連する、「正確な言葉」の復活に関わっていると論じる。その際には「ドラマII」と断章23との関わりを示すために、「緑」の「家」の構造に着目し、この「家」の構造と断章23の三つの層との比較を通して、「B」曲と「A」＝「言葉」の間に「ブリッジ」が作り上げられていることを確認する。同時に、冒頭に挿入されている「火事」の場面とこの場面の舞台である「緑」の「家」の「物干し台」の位置に着目し、この「ドラマII」の循環構造を明らかにするとともに、この場面が『風の歌を聴け』断章23の「再生」に関わっていると説く。

さらに、「緑」の「父」の「見舞い」の場面における「キウリ」のエピソードに注目し、「キウリ」を食べる「音」と、前章で考察した「キズキ」の「ビリヤード」の「ラストショット」は、いずれも『風の歌を聴け』における「C」即ち「歌」の伝達の場面の変奏として捉える。続いて、「見舞い」の場面における「父」の「四つのコトバ」を「世界の終り」の「ドラマI」と関連させ、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で作者の「頭」と「体」の合体が行われたあとの、この「父」の「コトバ」は、作者の「頭」、即ち断章23における「未完成の小説」＝「A」に関わる「言葉」であると解釈し、断章23の「C」＝「歌」と「A」＝「言葉」との関わりを「四」という数値と関連付けて論じている。この「四」という数値を「ドラマII」では「3+1」という数値に分解し、この「3+1」に基づいて、どのように東京の地図の「左」半分と「右」半分及び「ひっくりかえされた」断章23の「C」と「A」の間に「ブリッジ」が架けられているのかを考察する。この「ブリッジ」の比喩である「蛍」、そして「マッチ」という「モチーフ」に着目し、「蛍」、即ち「東京」の地図の中に築き上げられた「電気サーキット」を通して

行われる「正確な言葉」の再生を、「20年」の間繰り広げられる作者村上春樹の「個人的な」「ドラマ」と関連付けて論じている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、第一に、村上春樹の初期作品を、まったく新しい論理によって精密に読解し、作品の細部について、これまでにない説明を与えたことにある。すなわち、三つの作品の何気なく読み過ごされてしまいそうな諸々のエピソードとそのディテールが、各々相互に響きあって複雑な意味を構成していることを明らかにした点にある。第二に、作中に現れる主要な曲目自体が作品の主題と密接な関係を有していることが明らかになった点にある。第三に、それら単独の相関性と類似性を筆者が「洗い出し」と呼ぶ手法によって総合することを通じて、『風の歌を聴け』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』のそれぞれの構造が闡明された点にある。第四に、言葉の断念と数値への依存、それゆえにまた「音」と「歌」によって小説を作り上げる段階から創作を開始した村上春樹という作家が「ことば」を回復するに至る過程が示されたところにある。

総じて、テキストに真摯に向かい合い、その全体を有機的に理解しようとする筆者の態度がひしひしと感じられ、論考の全体を力強いものにしていく論文である。

望むらくは、筆者の読解自体は論理的なものであるとはいえ、論考をもう少し開かれたもの、分かりやすいものにする努力が払われても良かったように思われる。

さらに『風の歌を聴け』に関しては、筆者が「歌」の「伝達」と呼ぶ事態がどういうことであるかが説得的に語られていない憾みがある。「小指のない女の子」の「双子の姉妹」を「寝たきりの女の子」と同一視することには無理があること、筆者が重要視する断章23の最後の一行、「そんなわけで、彼女の死を知らされた時、僕は6922本目の煙草を吸っていた」を、「火」の「点火」に結びつけて後の論を展開するのもしささか強引すぎる感を否めない。

4. 結論

しかしながら、これらの問題点、改善を要する点は、本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。以上のことから審査員一同は、本論文が極めて独創性に富む論文であり、当該分野の研究に充分に寄与したと認め、一橋大学博士(学術)の学位を授与するのが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2010年7月31日

受験者 イェレナ・ブレドヴィッチ
最終試験委員 三浦 玲一、武村 知子、井上 義夫

2010年6月30日に、学位請求論文提出者、イェレナ・ブレドヴィッチ氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文《「音」から「言葉」へ——『風の歌を聴け』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』における小説の構造》に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、イェレナ・ブレドヴィッチ氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、イェレナ・ブレドヴィッチ氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。